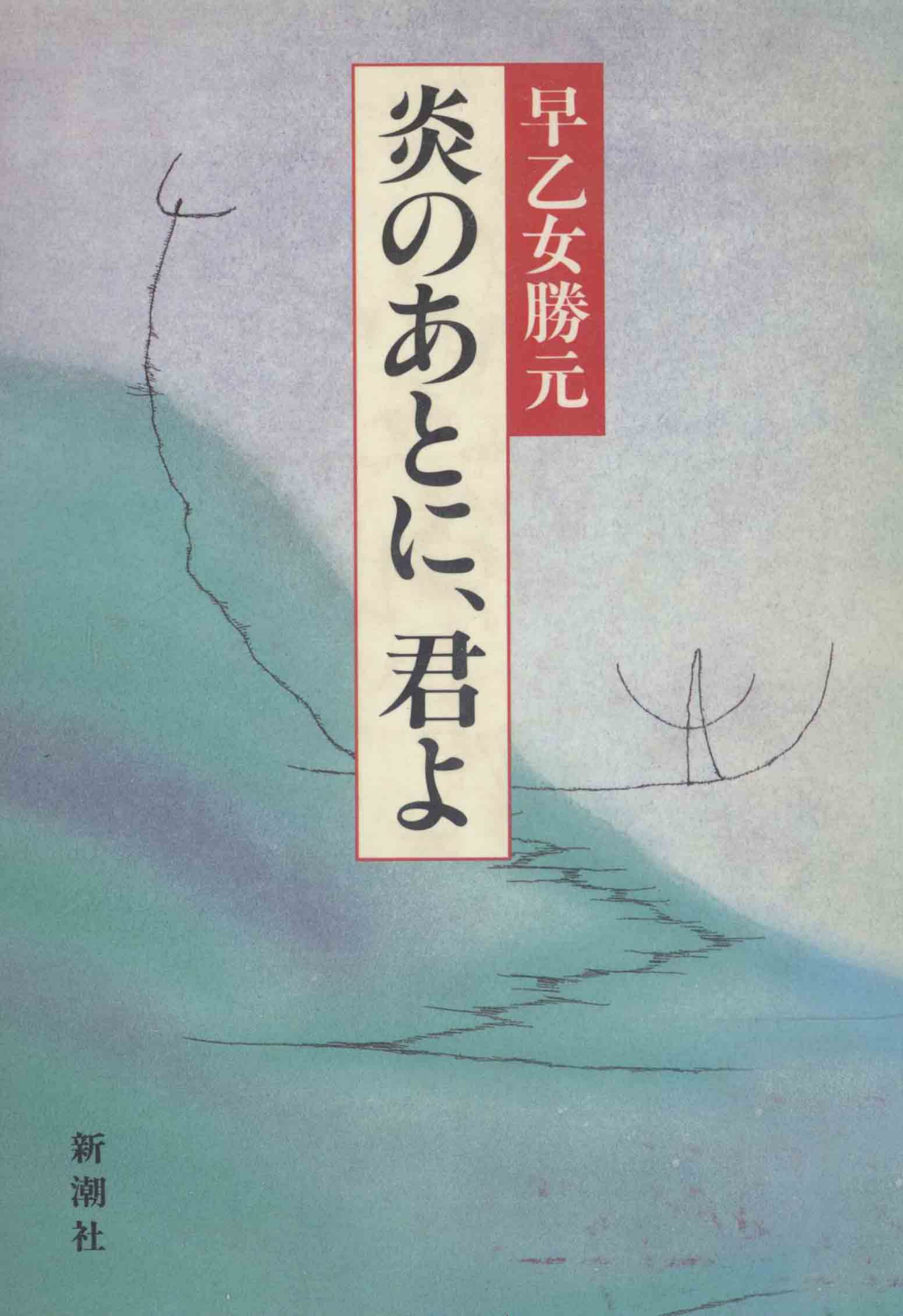


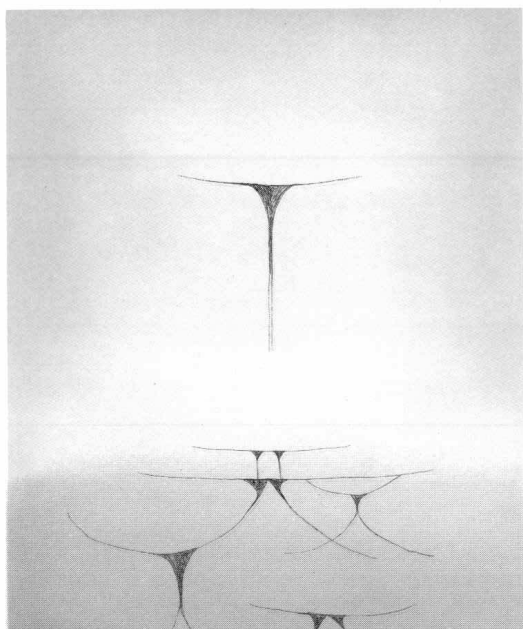


早乙女勝元

炎のあとに、君よ

新潮社

炎のあとに、君よ



ほのお
炎のあとに、君よ

著者／^きおと^めかつ^{もと}
早乙女勝元

＊

印刷／昭和 60 年 7 月 10 日

発行／昭和 60 年 7 月 15 日

発行者／佐藤亮一

発行所／株式会社新潮社

郵便番号 162／東京都新宿区矢来町 71／振替東京 4-808

電話・業務部 03(266)5111・編集部 03(266)5411

＊

印刷所／株式会社金羊社

製本所／加藤製本株式会社

＊

定価／1250 円

© Katsumoto Saotome, Printed in Japan. 1985

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付

下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-308807-9 C 0093

目次

第一章	ココアのひと匙	5
第二章	闇のなかで	46
第三章	包帯だらけの人	84
第四章	モノクロの世界	130
第五章	火だるまの子が	172
第六章	決別	214
終章	戦後とは……	263

装画·宇
樹夢舟

炎のあとに、君よ

第一章 ココアのひと匙

外出先から帰宅すると、郵便受けを覗いてみるのが、通例になっている。

覗くだけの価値はある。二度に一回くらいは、夕刊とともに、郵便物がたまっているのだ。先に帰宅した者は、日々のニュースや郵便そのものに関心がないか、薄いかのどちらかであろう。新聞や雑誌よりテレビが先行し、手紙より電話が重宝される。

要するに活字離れの時代ともいえるのだが、早瀬勝平は、もの心ついた時からなじんできたせいかな、はやりの映像文化よりも、文字による伝達のほうに比重が傾く。文字を書くのが仕事になってからは、なおさらのことだ。したがって、郵便物の量も多くなる。ダイレクト・メールなどもふくむ各種郵便物のなかには、自分の文字を活字でたしかめる機会もすくなく、そのたびにうんざ

りするのだが、まさか、彼のこんにちの生きかたそのものを問いかけるような一通が紛れこんでいようとは思わなかった。

その日、勝平は、サドルから腰を浮かせるようにして、自転車走らせてきた。駅からの距離が少しあるので、外出の場合はほとんど自転車利用である。

春先とはいえ、四月に入ってまだ寒の舞う異例な寒気で、吹雪く日が一体幾日あったことか。最初の積雪に大喜びした近所の子どもたちも、さすがに愛想をつかして、またかという表情である。この冬、景気よく売れたのは、ゴム長靴とスコップだったとか。

熱燗でやる一杯をたのしみにながら、きゅっと、ブレーキを踏む。

玄関先の飾り門は、ほんのおしるし程度のその部分だ

けのものなのだが、^{ハンドル}把手を回して開くに、ペンキの何か所かひび割れているのが、夜目にもあきらかであった。少し陽気がよくなれば、ぴらぴらとはがれて落ちることであろう。

勝平は舌打ちし、自転車を買取ハブの小屋に入れた。狭いところに、すでに四台もが首を突っこんでいる。ということとは、細君をはじめ、三人の子どもたちも帰宅済みということである。夕食時に一同が顔をそろえる機会は、日増しに減っていく。みな、そういう年頃になったのだ。

自転車を所定の場所に収納してから、鉄門を閉めて、郵便受けを開いてみた。ほら、みろ、といたくなつた。夕刊二部と、紙ひもで無造作に束ねられた郵便物が一束。そのほかに茶封筒の速達便があつた。一日分としては、これは多いうちに入ろう。読者からの感想文など、返書が必要とするものはためらうが、しかし手応えはある。

玄関口の土間で、速達便の裏を返した。なじみの、あの新聞の婦人部からである。

「また、きたか」

と、呟いた。つぎつぎ、仕事ばかりがよく追いかけてくる。

「あら、早かったのね」

居間のカーテンの隙間から、細君が顔を出した。

「うむ。出る日が続くと、疲れがたまるからな。それに、ちよつと風邪を引きこんだかもしれない」

「飲み疲れじゃないの。腹も身の内つていうわよ」

と、からかい加減にいうのに、勝平は、アノラックを脱ぎながら苦笑した。

教職にある細君は、家庭と職場とを両立させて自分もまた追われる身なものだから、勝平の仕事についてはおおよその輪郭くらいしか知らない。アルコールもストレス解消の一助にはなろうが、しかし、そう飲んでばかりもいられないのだ。

背広を着替えて居間に入ると、煙突つきの石油ストーブがかつかと燃えて、食卓の賑わいぶりといったら大変なものである。

「なんだ、おやか」

自分の食器類を台所に運ぼうとした大学生の憲が、額にたれた髪の毛を振るようにして、こちらを見た。

「なんだってことはないだろ」

「いいところへきたもんだ。へへっ、上肉は、みんなお先へ」

べろりと舌なめずりし、前歯をむき出して笑うのは、つい数日前、第一志望の高校に合格したばかりの二男の勇である。そういわれてみれば、食卓の上の鉄鍋は、きれいにからっぽである。

「兵どもの夢の跡か……」

いかにも、そんな感じであつた。

「どうせ、おとうは、油っこいものはそんなに好きじゃないんだよ」

と、一人前の憎まれ口をたたくのは、娘の花だ。両手を使って、小リスのようにせつせとミカンを口に運びながら、

「トシなんだからさ」

と、笑いもせずにつけ加えるのに、勝平は呆れはてて二の句を失う。

それでいて花は、坐っていた背もたれのある椅子からひょいと腰を上げて、横の丸椅子のほうへ移った。もつともラクな椅子は、父親の席だということを忘れない。食卓はかなりの大きさなのだが、一方に壁があつて、その両端は右から冷蔵庫が突き出し、左には日用品などが山積みしてあるので、五人家族でも一同が顔をそろえる
と肩と肩とが触れ合ってしまう。

「今日は、みんなご機嫌のようだな。すき焼きか」と聞くに、

「すき焼きふうごつた煮だ」

食後のお茶をすすりながら、ぼそりと、憲のいいぐさである。

「しかたないわよ、あなた。牛肉は高いから味付けだけにして、いろんな具を入れてみたのよ。あなたの分は、少し取つてあるけど」

と、細君が、照れたようにいう。

「そら、見る。残り物には福があるのさ」

勝平は、にやりほくそ笑み、勇の額をこくんとはじけば、

「ちよつ、こりや差別だな」

「たまに牛肉の匂いなんかする鍋物だと、あつというまね。ぐずぐずしてると、いいところみんな取られちゃうもんだから、勇なんか、食べながらも、お鍋の中をきつとにらんでさ」

「学校給食とやらも、たまにはこんな具合にしたら、子どもの食事が意欲的になるかしらんぞ。あてがいぶちだと、気がなくなるのさ」

「そう、取られる心配がないものね」

細君が、うなづく。

夕食時はいつも賑やかすぎるほどだが、つい先頃、ふと思いついて、食卓の上の照明を追加してから、とたんにみな顔色まで浮き上がって見えるようになった。

百ワットの電球が余分についたことで、電気代がどのくらい加算されたかはわからないが、食卓はやはり明るいほうがいい。同じ料理でも、輝いて見える。ということは、おそらく気分的にもかなりちがうはずである。

食事ばかりではない。

現に背もたれのある椅子にすわった勝平の位置から、家族一同の表情はもちろんのことだが、突き当たりの布張りの壁面が、より接近して見えるようになった。壁には、かれら三人の成長期におけるそれぞれの絵画作品や、賞状などが、ところ狭しとばかりに張つてある。憲がまだ小学生になったばかりの頃の、やたらと眼をむき出しにした自画像もあれば、動物の好きな勇のライオンみたいな猫のスケッチもあり、花の、その名のように色とりどりの花晶の中を行くなごやかな水彩画も。賞状は、よくたしかめたことはないが、読書感想文のコンクールから、絵の連合展覧会、水泳大会などの入賞に、虫歯なしの優秀賞まで。

ついこのあいだまで、親の後をいつでもどこでも、三羽の雛のようについて歩いてきたけれども、上の二人まではついに親父の身長を超え、娘の花もあと数日のうちに中学生になる。振り返れば、あつという間の出来事のようなのである。

「思い出したがね、さつき、帰りの電車でマツちゃん先生に会つたよ。先生んとこの娘がね、ほら、なんといいたけかな。勇と同じA高校を受けたのだそうだ」

細君を中心に子どもたちの話がふと途切れたところで、勝平はいってみた。マツ子先生は、娘の保育園時代の担任で、家がそう遠くないところから、その後もよくいろいろな場所であう。先生には、勇と同じ年の娘がいた。

「ああ、美樹ちゃんよ。どうなつたつて？」

と、細君が聞く。

「それが、ばつたり顔を合わせたたん、向こうから先に聞かれたもんだから、ええ、まあ、なんとか受かりましたよと答えたら、その後が悪かった。あちらは落ちたのだそうだ」

「そう。がっかりしたでしょうね。A高校の場合、女子の競争率は、男子とくらべ、わりと楽だったっていうけど」

細君は教師だから、その痛みが通じるのだろう、湯飲みを手にして眼を伏せる。

「お宅は、いざとなると、みんな底力を発揮して、おニイちゃんは音大に、勇ちゃんもA高校に……なんていわれて、まったく弱ってしまった」

「そうとも」

横で、親たちの会話を小耳にはさんだ勇が、ぱちっと指を鳴らして、

「やっぱり、これは底力の問題ですよ」

「阿呆。のぼせるな」

勝平は、たちどころに一喝し、

「落ちた者の身になって考えるんだ。それが出来ない者は、いつも零点だぞ」

「へっ！」

相手は、スッポン状に首をすくめた。

とたんに、玄関のチャイムが鳴った。細君が、はずんだ声で出てゆく。

話し声ですぐにわかったことだが、夜分の訪問客は、近所に住む知り合いの奥さんであった。花の中学用の制服やら体育着などが、おさがりということ、どっさり届けられたのである。細君が、この時期のために、あら

はじめ声をかけておいたのであろう。

ちようど夕食を終えたところだったから、細君のすすめで、花は早速にもらいものの制服着用となった。

洗面所で着替えた花は、髪をお下げに編み、セーラー服姿で、先に別なところからもらった通学用カバンを手にして登場した。

「そんなに、じろじろ見ないでよ。背なか、むずむずするじゃんか」

と、本人は照れかくしに笑ったが、すっと片足をうしろに引いて、バレエ用の答礼を真似て見せる。

その仕草が、セーラー服と調和して、急に娘になったかのように、勝平には思われた。これだから、とかくの批判はあつても、制服はやめられないのだろう。だれが好むというなら、本人よりも、むしろ親自身なのだ。服装に気を使う必要がないという便利さよりも、制服により、わが子が急に一人前になったような気がするのではないか。その意味では、成人式の晴着と共通する感覚かもしれない。

「ちよつと、なげえなあ、スカートが。おまけにハクのついたカバンだな」

と、勇が冷やかしかし気味にいい、ひょうと口笛を吹く。

「え？ ほんと？」

娘は、たちまち浮足立つ。

「そんなことないわよ。ちょうどいいわ。これ以上あげたら、ミニになっちゃうじゃないの」

と、細君がブレーキをかけないことには、花の不安は、悪兄貴どもにそのかされて一人歩きしていくばかり。

花は、生まれつき小柄な娘だった。おまけに早生まれとあって、小学校に入学した時点では、前から数えて二三番といったところであった。大きな赤いランドセルを背にすると、まるでランドセルに手足が生えたみたいで、これで、一人で通学できるのかと氣を揉んだものである。

それが、五年生あたりから、竹の子みたいにツンツンとはずんで伸び始めた。いま、細君にもう一息のところである。バレエなど習い始めて、それまで額を被っていた前髪をうしろに編むようになったら、勝平に似て、丸く張り出した額の下に、眉がぎりりと上がっている。よくしゃべる積極的な性格で、それが長所でもあれば短所でもあるのだが、桜色のほおに笑くぼを作って、いつもしゃべって笑ってばかりいる賑やか娘だ。

「花ちゃん、いくつだったけ？」

勝平は、ふと何気なくたずねた。

「十二だよ。やだなあ、おとうは、娘の年くらい覚えてくれなくっちゃ……」

「ああ、十二か」

「ほら、始まったぞ」

勇が、憲と顔を見合わせて、意味ありげに、うひひと笑う。

「なんだ、なにがおかしいんだ」

「おとうが、三月十日を体験した年だといいたいんだろ」

「そうだ。昭和十九年の四月に高等科へ、いまでいう中学に入学してだな。七月末までの一学期だけしか学校に行かせてもらえなかった。夏休みが終ると勤労動員で、あとは空襲のなかを逃げまどう日々になる」

「勇、これだよ」

と、憲がもう聞きあきたといわんばかりに、

「おとうの書くものは、大空襲ばかりだ。もうちよつと才のあるところも見せてもらいてえよ」

「オイオイ、なにいつてんだ」

勝平は、黙っていられたかった。コップ酒が少し効いてきたこともある。

「おとうが、もし三月十日に死んでいたとしてみる。お

まあ、どうなったと思う」

「カンケイないね、そんなこと」

勇は、へつと鼻先に息を抜く。

「おーさ」

と、これは兄貴だ。

「まったく、なにもかもわかつちやいねんだな。要するにおめえら、この世にいないってことよ。いないってことは、いいか、存在してないってことだぞ。この世界のどこに、親なしで生まれた子がいたか」

「はい、おりました。キリストが」

と、勇が調子よくまぜ返すに、花のセーラー服のリボンを結び直していた細君から、水が入った。

「いい加減にしたら……つまらない話。あんたたちも、おとうさんをからかうんじゃないわよ。洗い物は、だあれ。順番はどうなってるの？」

男ども二人は、とたんに肩をすくめた。

「今日の番は、花だ」

憲はそういい、たちまち尻尾を巻くように退散すれば、セーラー服の花がちがうと反撃し、食後の後片付けをめぐって、勇との口論になった。三人しかないのに、こんなことで毎度口論が絶えないのは、まだまだ一人前と

いえない証拠ともいえる。

話相手を失った勝平は、もう少しやりたい酒を自重して、食事を終えた。この後、郵便物くらいは整理しておかなければと思う。明日は、朝から予定した仕事がある。彼がいま取り組んでいる仕事は、口に出していえば、また大空襲ものかと子どもたちからくさされそうだが、第二次大戦下日本の空襲・戦災に関する資料のまとめである。もちろん、小説ではない。

創作では、やはり才がものをいう。それが筆力となり、説得力にもなる。しかし、才がない以上は仕方がない。何人かの心あるメンバーと手を取り合って、東京空襲に関する総合的な資料集作りに取り組んだのは、まだ彼の三十代の内であった。

それから、ざっと十五年近く、このテーマにしがみついて、当初予想もつかぬ成果を上げたとは思う。空襲・戦災を、一般市民の立場でとらえた総合的な資料集は東京編を終え、日本本土全体をもまとめ終えて、すでに数年になる。次に勝平が、信頼できる学者、評論家とともに着手しているのは、今度はアメリカ側の戦略爆撃が日本本土に及ぶ「爆撃した側」の新資料の解明、分析である。戦後四十周年を記念する企画とあって、タイミング

をはずせぬことから、緊急の作業になっている。これも、だれかが、いつか、やらなければならぬ。

ために、今日も、そのうちあわせに外出したのである。

「また、大空襲ものか……」

勝平は、憲の口調に思いを重ねて、苦笑せざるを得なかった。

しかし、悪い気はしなかった。おやじの仕事はそれだ、と子どもたちが自覚してくれているのは、まんざらでもない。馬鹿の一つ覚え、ともいうではないか。

それから、勝平は書斎に入った。

書斎といえば聞こえはいいが、今はやりのビジネス・ホテルの一室みたいなものである。中古で安く購入した事務用机に、サイド・テーブル。電気スタンド。そして、万年床といったところで、床の周囲には読みかけの書籍や新聞の切り抜きなどが、おびただしく散乱している。

深夜でも、眠れぬままに読書をしたり、メモを取るようになってから、この万年床に追いやられてしまつて数年になる。好き勝手なことができるのがよかった。日中でも疲ればペンを捨てて、ごろりと横になることができる。

おそろしく殺風景な味気ないデスクに向かつて、電気スタンドをぱちりと点灯し、その照明の下でペンなり鉛筆なりを手にすると、もはや習性なのか、不思議に気持ちが落着く。

勝平は、考えていた。

彼が最初に東京空襲を記録する運動を心ある人々と呼びかけたのは、一九七〇年夏のことだったが、七二年春に花は生まれた。

二人の男の子に続く女子誕生と知った時、まだ幼かった憲は、「大変だ、そんなちっちゃなスカートはねえぞ」とあわて、勝平もまた、奇妙に気恥ずかしいような感情にとらわれたものであった。それまで一家は、男ばかり三人。異性は細君だけしかいなかったからかもしれない。その花が、保育園を終えて、小学校に入学したのは、つい昨日のこのようである。それなのに、いつのまにか、中学生に……。花の寝顔にマジック・ペンで八の字ひげを書き、時に三輪車に乗せて犬に引かせて歩いたいたずら突貫小僧の勇も、この春、高校生だ。弟妹たちのめんどろをよく見、融通はきかないが誠実な憲も大学二年に進級する。それぞれが、成長期の大きな節目を越えていく。そして、来年は戦後四十年である。

あの「炎の夜」から、とうとう四十年もの歳月が経過するの。これで、空襲・戦災を記録する作業も、十五年目を迎えることになる。仕事は、急がねばならない。そうでないと、過去の空襲・戦災が、またまた繰り返されることも絶無とはいえないのだ。状況はあきらかにキナ臭い匂いもふんぷんと、いつか来た道に踏み込み、「新たな戦前」の声さえもさげばれている。後世代に手渡すべき平和が、まるでローソクの炎のように揺らいできた感じではないか。

勝平は、さつき手にしたばかりの茶封筒の封を切った。さしあたり、こちらから片付けなければ……。

それは、ある新聞の「人生指針」の投稿だった。いわば人生相談だが、今年いっぱいという約束で、勝平はその回答者を引き受けていた。レギュラーのカウンセラーは、医者や弁護士もふくめて六、七人だったから、週に一回は番が回ってくる。それぞれの生活上の複雑な悩みをごく短かな文章で判読し、わずか五百字ばかりの回答を書くなどということは、思えばずいぶんおこがましいはずの作業だが、それはあえて承知の上であった。

悩みの手紙から、現代社会の非人間的な皮相がとらえられるかもしれない。それも、あるいは勉強のうちに入

ろう。

投稿は、いつものように三通ほど同封されていた。担当記者にすれば、多少のストックが必要なのだろう。その内容によって、カウンセラーは振り分けられるが、医師や弁護士でない回答られぬケースもある。勝平の場合は、ただ人間的な角度から投書者と一緒に考えるくらいのことしかできない。最初に依頼を受けた段階で、記者にはそう伝えてある。

しかし、毎度、なんと深刻な悩みばかり、突きつけられることか。

今回も、手にしたところから眼を通していくと、一つはサラ金で身を持ち崩した実弟の相談で、母が死んだ後、老いた父の貯金まで引きおろし、意見すれば荒れ狂って暴力行為に及び、母の仏壇まで放り捨てる始末だが、どう立ち直らせるべきかという。父の身を案じる姉からの投稿である。どうしたらいいのかと聞かれても、とっさに妥当な返事が思い浮かばない。

受験生ではないが、難問は後回しにして、二通目を読む。

次は二人の子を抱えた二十代の主婦。短気で見栄っぱりな夫が、一つ職場に落着かず、スナック経営に手を出

してから、ほかに女が出来、暴力事件に巻きこまれて、これまたサラ金の追い討ち。この人についていつて、これからはたしてしあわせになれるのかどうか。

あまたいる男性の中から、選りにも選って、なんでそんな男を……と、つい口にしたくなつたが、そういつてみても始まらない。先の暴力をふるう弟といい、見栄っぱり亭主といい、いずれも三十代の働き盛り。一人前の社会人であり、生活者であるはずなのに、一人前になりきれない者をめぐって悩みが絶えないのは、ケジメのつかぬ社会の反映なのか。どちらも、一筋縄ではいいかない。

三通目を開く。

いかにも几帳面な文字が、びつしりとこまかく便箋を埋めていた。好感が持てた。投稿はすべて肉筆だから、筆跡や、文章の運び具合で、ある程度まで筆者の性格がうかがえる。

とし、四十一歳の主婦です。

夫にも相談できぬことで、このところ、ずっと悩んでいます。それには、私の不幸な生いたちから、ご説明しなければなりません。私は、戦災孤児です。

勝平は、小さく息を呑んだ。どの投稿も書き出しのスタイルは似たりよったりだが、「私は、戦災孤児です」という前置きが気を引いた。

これは、つい先頃の東京大空襲記念日と、かならずしも無縁ではないように思われる。毎年三月十日ともなると、いくつかの市民団体や労働組合が、申し合わせたように平和集会を開く。なにしろ一晩で十万人からの市民が生命の犠牲を払ったのだから、この日こそ、広島・長崎の惨禍と結んで東京都民の平和の原点であるという主張はもつともで、いずれの集会にも勝平は多少のかかわりを持ち、マス・コミも、決して充分とはいえないが協力してくれる。

投稿は、あるいはその反響の一つとも考えられるが、担当記者は、それぞれの回答者の性格を調査ずみだから、戦災孤児の問題なら勝平向きと判断したのであろう。

勝平は、その先を読む。

私は、戦災孤児です。

昭和二十年三月十日の大空襲で、ひとりぼっちになつてしまいました。まだ二歳になつたばかりでしたか